

令和5年度 出雲市文化財調査報告書

矢野遺跡（第10次発掘調査）
下古志遺跡（第6次発掘調査）

令和6年（2024）3月

出雲市教育委員会

令和5年度 出雲市文化財調査報告書

矢野遺跡（第10次発掘調査）
下古志遺跡（第6次発掘調査）

令和6年（2024）3月

出雲市教育委員会

序

本書は、民間事業者から依頼を受けて実施した、集合住宅新築工事に伴う矢野遺跡第10次発掘調査、下古志遺跡第6次発掘調査の成果を収録した報告書です。

矢野遺跡は縄文時代から、下古志遺跡は弥生時代から長期間続く遺跡であり、いずれも出雲平野を代表する大規模な集落遺跡として知られています。今回報告する調査でも、矢野遺跡では弥生時代から古代を中心とする時期の遺構と遺物を、下古志遺跡では中世を中心とする時期の遺構と遺物を確認しました。これらの調査成果が、出雲平野における大規模集落遺跡の様相や地域の歴史を解明する上での貴重な資料の一つとして活用されることを期待します。

本書が地域の歴史や埋蔵文化財への理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

令和6年（2024）3月

出雲市教育委員会

教育長 杉谷 学

例 言

1. 本書は、出雲市が平成30年度(2018)に実施した集合住宅新築工事に伴う矢野遺跡第10次発掘調査、令和4年度(2022)に実施した集合住宅新築工事に伴う下古志遺跡第6次発掘調査の成果をまとめた報告書である。

2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

○平成30年度矢野遺跡第10次発掘調査(現地調査)

調査地及び調査面積 島根県出雲市矢野町732ほか 約100㎡

調査期間 平成31年(2019)1月28日～2月28日

調査体制 事務局 木村 亨(出雲市市民文化部次長兼文化財課課長)

景山真二(出雲市市民文化部文化財課 課長補佐兼埋蔵文化財1係長)

調査員 須賀照隆(同 主任)

調査補助員 長岡伸幸(同 臨時職員)

発掘作業員 伊藤伸 伊藤貴敏 川上晴夫 高根常代

調査協力 大東建託株式会社松江支店

調査指導 勝部智明(島根県教育庁文化財課主幹)

○令和4年度下古志遺跡第6次発掘調査(現地調査)

調査地及び調査面積 島根県出雲市下古志町628-2ほか 約30㎡

調査期間 令和4年(2022)7月4日～7月20日(発掘調査)

調査体制 事務局 片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課課長)

吾郷尚志(出雲市市民文化部文化財課 課長補佐)

調査員 須賀照隆(同 埋蔵文化財1係長)

調査補助員 加藤章三(同 会計年度任用職員)

発掘作業員 漆谷繁富 田邊宏行 寄廣和人(同 会計年度任用職員)

整理作業員 妹尾順子(同 会計年度任用職員)

調査協力 東建コーポレーション株式会社出雲支店

調査指導 今福拓哉(島根県教育庁文化財課管理指導スタッフ主任主事)

○報告書作成【令和5年度(2023)】

事務局 森山賢次(出雲市市民文化部次長兼文化財課課長)

三原一将(出雲市市民文化部文化財課 主査)

吾郷尚志(同 課長補佐)

調査員 須賀照隆(同 埋蔵文化財1係長)

調査補助員 加藤章三(同 会計年度任用職員)

整理作業員 前島浩子(同 会計年度任用職員)

3. 本書の執筆と編集は、職員の協力を得て須賀が行った。

4. 本書に掲載した出土品の実測は、須賀、加藤が行った。

5. 図面・遺物の整理作業は須賀、加藤、妹尾、前島が行った。

6. 本書に掲載した写真は、須賀が撮影した。

7. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。
8. 本書で使用した方位は座標北、座標は世界測地系Ⅲ系に基づく。標高は海拔高を示す。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SD－溝 SK－土坑 SP－柱穴
10. 遺物の時期決定については、以下の文献を参考にした。

弥生土器

正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年』山岡・山陰編 木耳社

須恵器・土師器等

岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター

大谷見二 2001「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡9 総括編』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討―」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

中世土師器

出雲市教育委員会 2015『出雲鷺潭寺埋蔵文化財調査報告書』出雲市の文化財報告書 28

島根県教育委員会 1999『古志本郷遺跡1』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書 6

陶磁器

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会

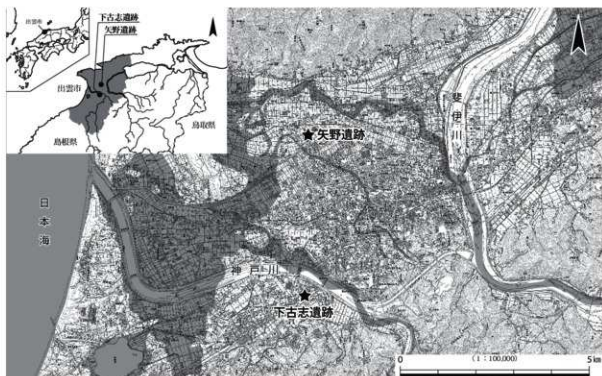
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

備前市教育委員会 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財報告書 11

和鏡

広瀬都筑編 1938『扶桑紀年鏡鏡図説』大阪市立美術館学報第1 大阪市役所

内川隆志 2014『鏡と信仰-和鏡の成立と展開-』印旛都市文化財センター第18回遺跡発表会講演資料



調査地の位置 ※網掛けは弥生時代の推定水域

本文目次

第1章 矢野遺跡第10次発掘調査	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第3節 調査の成果	4
第4節 結語	12
第2章 下古志遺跡第6次発掘調査	13
第1節 調査に至る経緯と経過	13
第2節 遺跡の位置と環境	13
第3節 調査の成果	14
第4節 結語	18

挿図目次

第1図 矢野遺跡第10次調査の位置	2	第8図 遺構内出土遺物実測図	10
第2図 事業地内基本層序	2	第9図 遺構外出土遺物実測図	11
第3図 調査区配置と事業地内調査状況	3	第10図 下古志遺跡第6次調査の位置	14
第4図 I区遺構実測図(1)	6	第11図 調査区配置と事業地内調査状況	15
第5図 I区遺構実測図(2)	7	第12図 調査区・遺構実測図	16
第6図 II区遺構実測図	8	第13図 土器だまり・和鏡出土状況実測図	17
第7図 III区遺構実測図	9	第14図 出土遺物実測図	19

写真図版目次

矢野遺跡

図版1	I区全景 I区南半部 I区SK1・SD1 I区SD1遺物出土状況
図版2	II区全景 II区SD2・SK2・SK3
図版3	III区全景 III区SK5遺物出土状況 III区SD4出土状況

図版4	出土遺物1
図版5	出土遺物2

下古志遺跡

図版6	調査区全景 遺構検出状況
図版7	和鏡出土状況1 和鏡出土状況2
図版8	土器溜まり土師器出土状況 出土遺物1
図版9	出土遺物2

第1章 矢野遺跡第10次発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

2018年、出雲市矢野町地内の集合住宅新築予定地（例言位置図・第1図）について事業予定者代理人と埋蔵文化財に係る事前協議を実施した。予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である矢野遺跡の範囲内であることから事前に確認調査を行うこととし、同年12月5日に実施した。確認調査及び既往の調査（4次調査B地点）の結果から、事業予定地の南部には遺構・遺物が残存すると判断した（第2・3図）。その後事業者と出雲市文化財課で協議を重ね、2019年1月から本発掘調査と工事立会を実施することとなった。

本発掘調査は、事業用地約2,150㎡の内、遺跡への影響が大きい浄化槽埋設工予定範囲2箇所、西側擁壁工予定地1箇所の計約100㎡を対象とし、2019年1月28日～2月28日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果、遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。なお、工事立会については同年1月22日～3月14日の期間で本発掘調査と併行して断続的に実施した。

<発掘調査に関連する主な文化財保護法上の文書等>

2018年

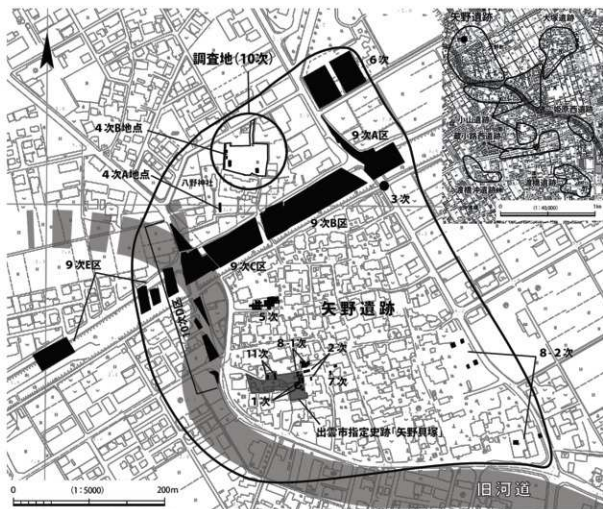
- 12月12日 「埋蔵文化財発掘の届出について」事業者から市教委経由で県教委へ
- 12月18日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

2019年

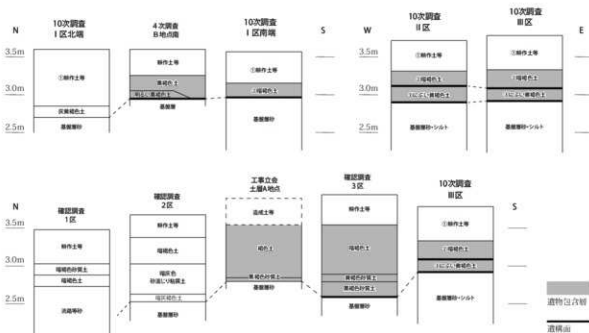
- 1月15日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 2月28日 「矢野町地内集合住宅新築工事に伴う下志遺跡発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 3月1日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 3月1日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 3月1日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 3月18日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委から市教委へ

第2節 遺跡の位置と環境

矢野遺跡は出雲市矢野町に所在する集落遺跡で、出雲平野のほぼ中央部に立地する。かつての平野西部には大きな潟湖が広がり、斐伊川と神戸川が流れ込んでいた（例言位置図）。遺跡は神戸川水系の沖積作用によって堆積した三角州状の微高地北端に位置する。近隣約1.5km四方の範囲に及ぶ大規模な集落遺跡群「四絡遺跡群」（矢野遺跡・小山遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡・蔵小路西遺跡・渡橋遺跡・渡橋沖遺跡）を代表する遺跡として知られるほか、その一部は「矢野貝塚」の名称で出雲市指定史跡となっている（第1図）。これまで11次にわたる発掘調査が実施されており（註1）、縄文時代後期から近世に至るまで長期間安定して営まれた集落であることが確認されたとともに、弥生時代の拠点集落とし



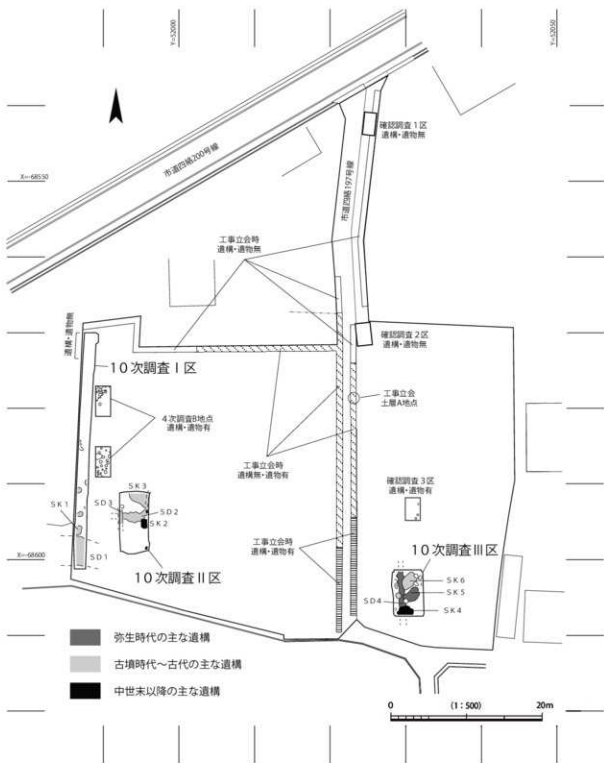
第1図 矢野遺跡第10次調査の位置



第2図 事業地内の基本層序

での評価も受けている（田中1996・出雲市教育委員会2010）。

今回の調査地（矢野遺跡10次）は矢野遺跡の北端部で、『出雲国風土記』記載の「八野社」として知られる八野神社の北東に隣接する（第1図）。また、事業地内には出雲平野集落研究会による矢野遺跡第4次発掘調査B地点があり（第3図）、調査では古墳時代から古代を中心とする時期の遺物と柱穴等が確認されている（田中ほか1987）。



第3図 調査区配置と事業地内調査状況

第3節 調査の成果

1 調査の概要(第2・3図)

事前の確認調査として、事業予定地東部を中心に3m×1.7mの調査区1箇所(Ⅰ区)、3m×2mの調査区2箇所(2・3区)、計約17㎡の発掘調査を重機掘削によって実施した。3区で柱穴と須恵器・土師器等を確認したが、1・2区では遺構・遺物は確認できなかった。第4次調査B地点の調査状況を合わせ、確認調査2区より南方に遺構・遺物が残存するものと判断した。

本発掘調査は、西側擁壁基礎工予定範囲の約45㎡(Ⅰ区)、浄化槽埋設工予定範囲の約30㎡(Ⅱ区)と約25㎡(Ⅲ区)、合計約100㎡を対象として実施した。基本層序①②層を遺物を確認しつつ重機で撤去した後、人力掘削によって徐々に掘り下げて遺構・遺物の確認を行った。基本層序は上から①耕作土等、②暗褐色土(近世含む遺物包含層)、③にぶい黄褐色土(古代以前の遺物包含層・中世末以降の遺構面)、基盤層砂層等(弥生～古代の遺構面)の順で、③層上面と基盤層上面が遺構面として確認できた。

本発掘調査で確認した遺構としては、溝4基、土坑6基の他、柱穴を多数確認している。遺構の多くが古墳時代中期後半～古代のものであると考えられ、その他の時代の遺構としては、弥生時代後期後葉頃の土坑SK5とそれ以前に掘削された溝SD4、中世末以降の土坑SK2・4や数基の柱穴が確認できる程度である。その他、工事立会調査においてもⅢ区西方で古代以前と推定される柱穴を多数確認したほか、古墳時代～古代の遺物を中心に一部弥生時代前期に遡る遺物も確認した。

2 遺構と遺物(第4～9図)

Ⅰ区 溝SD1(第4・5・8図, 図版1・4) Ⅰ区南端で検出した溝である。南西方向に延び、東側では東南東方向へやや屈曲する。幅約3.5m、深さ約0.7mを測る。③層下面で掘り返しが認められる。遺物は遺構内堆積土⑥層以下から弥生土器(1)・土師器(2・3)が、掘り返し後の堆積土⑥層から土師器(4～8)・須恵器(9)の小片が出土している。1は弥生土器壺の口縁部、2・3・7・8は土師器高杯である。3・8には赤色塗彩が施されている。4～6は土師器壺の口縁部、9は須恵器甕頸部である。1の弥生土器を除き、概ね古墳時代中期後半～奈良時代頃の資料である。

Ⅰ区 土坑SK1(第4図, 図版1) Ⅰ区SD1の北方隣接地点で検出した楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸1.15m、短軸0.9m程度、深さ0.65mを測る。遺物は須恵器・土師器の細片が比較的多く出土しており、須恵器甕片の他、厚手の赤彩土師器片などが確認できる。図化可能な資料は無いが、古墳時代後期～奈良時代頃の遺構であろう。

Ⅱ区 溝SD2(第6・8図, 図版2・4) Ⅱ区のほぼ中央部で検出した東西方向に伸びる溝である。調査区東壁付近で北方へと屈曲している。幅0.5～1.2m、深さ0.2m前後を測る。遺物は土師器高台付杯底部(10)が確認できるほか、須恵器や古代の赤彩土師器細片等が比較的多く出土している。9世紀頃の遺構であろう。

Ⅱ区 溝SD3(第6図, 図版2) Ⅱ区の西端で一部を検出した溝である。幅0.5m以上、深さ0.17

m前後を測り、北方へ向けて浅くなり消失する。遺物は土師器細片のみで時期も不明であるが、溝S D 2埋没後に掘削されている。平安時代の遺構であろうか。

Ⅱ区 土坑SK 2 (第6・8図, 図版2・4) Ⅱ区の東端で一部を検出した楕円形状の平面形を呈する土坑である。南北軸1 m、深さ0.4 mを測る。基本層序③層上面から掘削されている。

遺物は埋土から須恵器・土師器等の細破片が確認できるほか、表土掘削及び壁面精査時に遺構上面付近で土師器皿(11~14)がまとめて出土しており、これらの土師器皿が遺構に伴う遺物と考えられる。いずれも底部に回転糸切り痕が残る。16世紀後半~17世紀頃のものであろう。

Ⅱ区 土坑SK 3 (第6・8図, 図版2・4) Ⅱ区の北東端で一部を検出した土坑状の遺構である。検出範囲においては南東~北西方向に長軸をとる楕円形状の土坑が想定できる。長軸3.4 m以上、短軸1.9 m以上、深さ0.2 m前後を測る。遺物は土師器甕等の口縁部(15)が出土している。遺物は僅少だが前述の溝S D 2に先行しており、奈良時代前後の遺構とみられる。

Ⅲ区 溝SD 4 (第7図, 図版3) Ⅲ区の西寄りで検出した南北方向に伸びる溝である。幅0.9 m前後、深さ0.25 m前後を測る。底面の標高は2.45~2.6 mで、北方に向けて低くなる。遺物は弥生土器の細片が確認できる。後述の土坑SK 5に先行する。弥生時代後期頃の遺構であろうか。

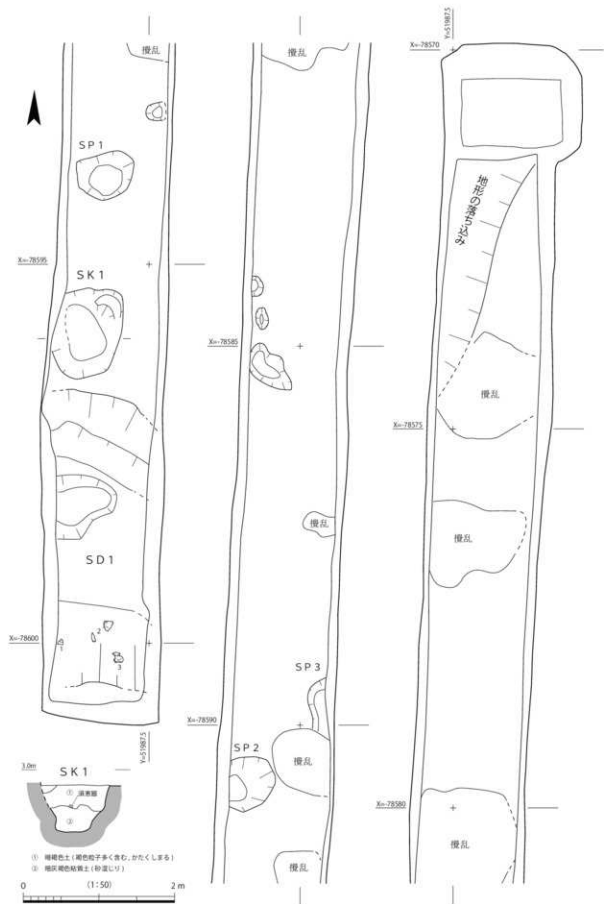
Ⅲ区 土坑SK 4 (第7図, 図版3) Ⅲ区の南端で検出した円形状の平面形を呈する土坑である。南東側にステップを持ち、底部は北西に偏る。復元径約1.9 m、底面径約0.4 m、深さ0.5 mを測る。基本層序③層上面から掘削されている。遺物は須恵器・土師器等の破片が出土しているが、Ⅱ区SK 2と同様の遺構面であり、中世末以降の遺構であろう。

Ⅲ区 土坑SK 5 (第7・8図, 図版3・4) Ⅲ区のほぼ中央で検出した南西~北東方向に長軸をとるいびつな楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸約2.1 m、短軸約1.2 m、深さ0.35~0.5 mを測る。遺物は遺構埋土上面付近から弥生土器(17~23)がまとめて出土している。いずれも弥生土器の壺甕である。口縁部外面は平行線文を施すもの(17・22・23)とナデ消すもの(19)、無文のもの(18)が混在する。体部外面には17・20で刺突文、18で波状文が確認できる。また、17・21・23では頸部付近の内面にミガキが施されている。いずれも弥生時代後期後葉から終末期の資料であり、遺構の時期を示すと考えられる。土坑墓であろうか。

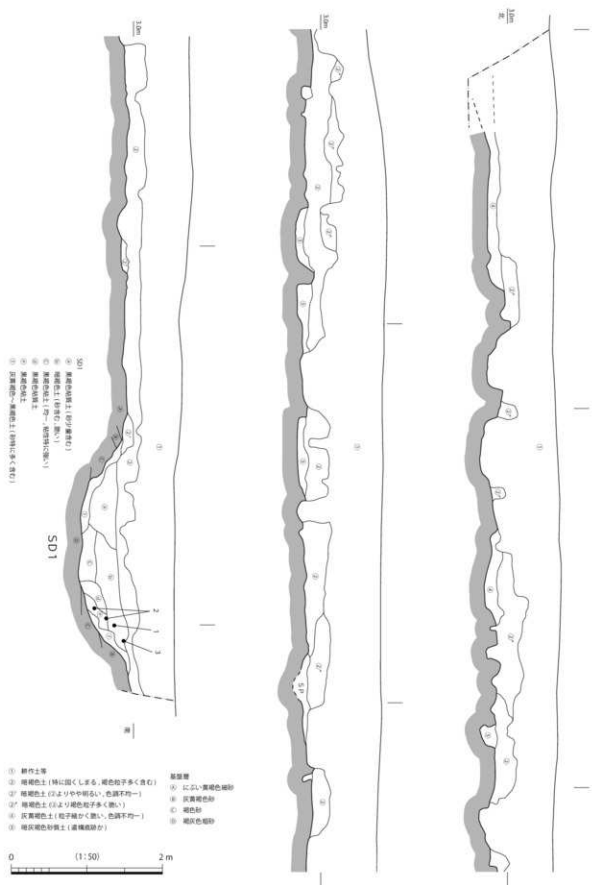
Ⅲ区 土坑SK 6 (第7・8図, 図版3・4) Ⅲ区の北寄り、SK 5の北に隣接して検出した南西~北東方向に長軸をとる楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸2.5 m、短軸1.55 m、深さ0.25 m前後を測る。遺物は須恵器・土師器等の小片が出土している。16は須恵器杯蓋で、輪状つまみが確認できる。遺物は僅少だが、奈良時代頃の遺構であろう。

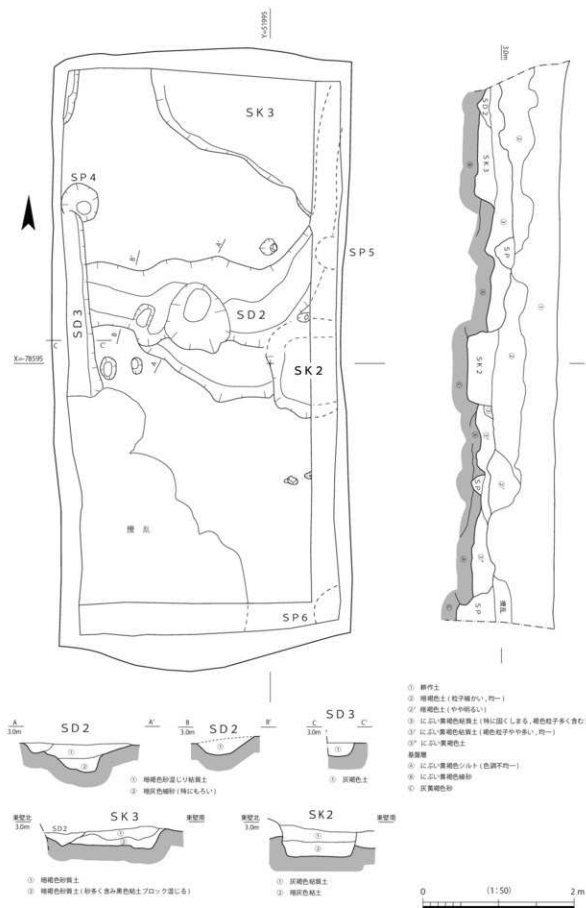
柱穴群 (第4~7図, 図版1~3) I区北部をのぞくほぼ全域で柱穴状遺構を確認しているが、明確な並びは把握出来ない。I区では深さ0.2 m未満の浅い柱穴が、Ⅱ・Ⅲ区では深さ0.2~0.5 mの柱穴が中心に分布している。埋土は基本的に暗灰褐色~暗褐色土である。遺物はI区SP 1~3とⅢ区SP 8で須恵器・土師器小片が出土した。古墳時代中期後半~古代の遺構であろう。基本層序③層上面から掘削されたⅡ区SP 5・6は中世末以降の柱穴と考えられる。

遺構外出土遺物 (第9図, 図版4・5) 遺構外出土遺物については、比較的遺存状態が良好な本発掘

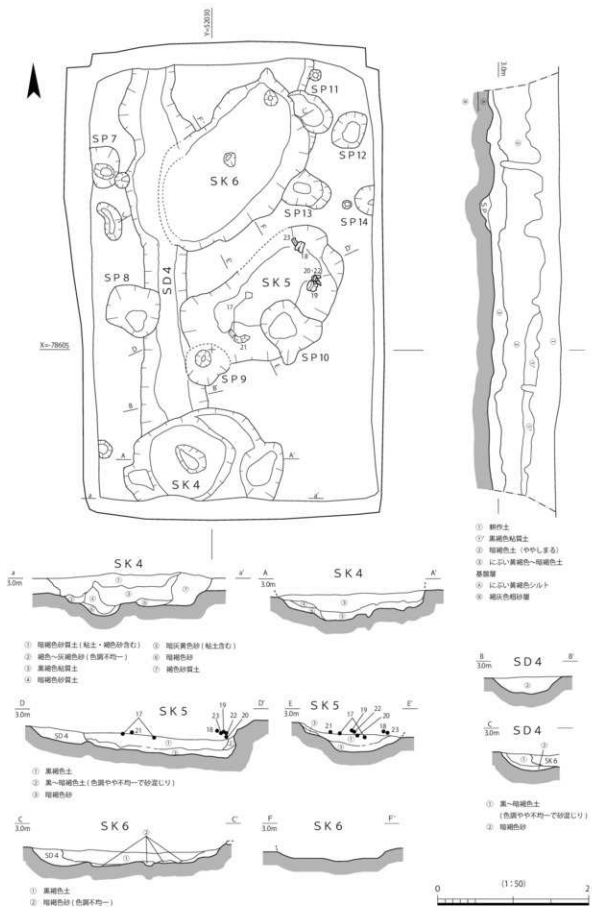


第4図 I区遺構実測図(1)

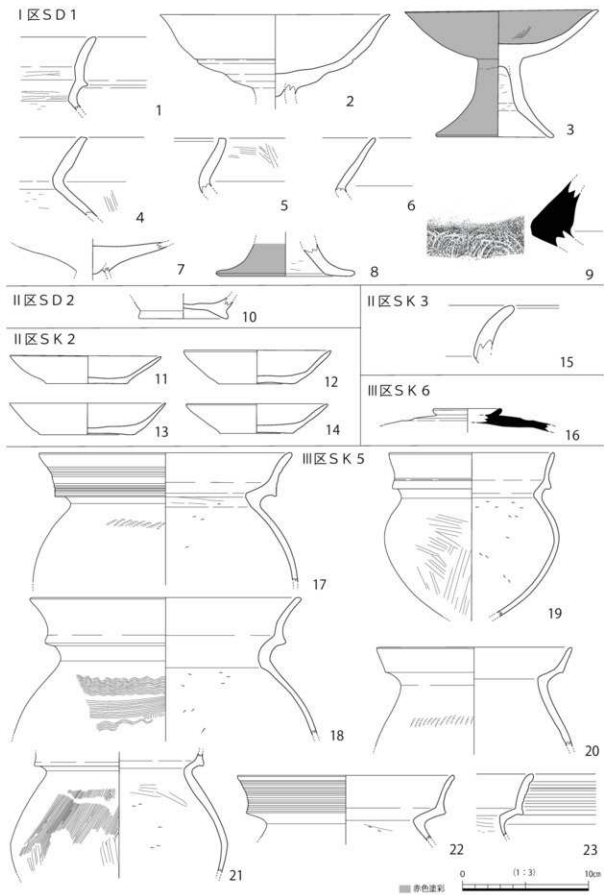




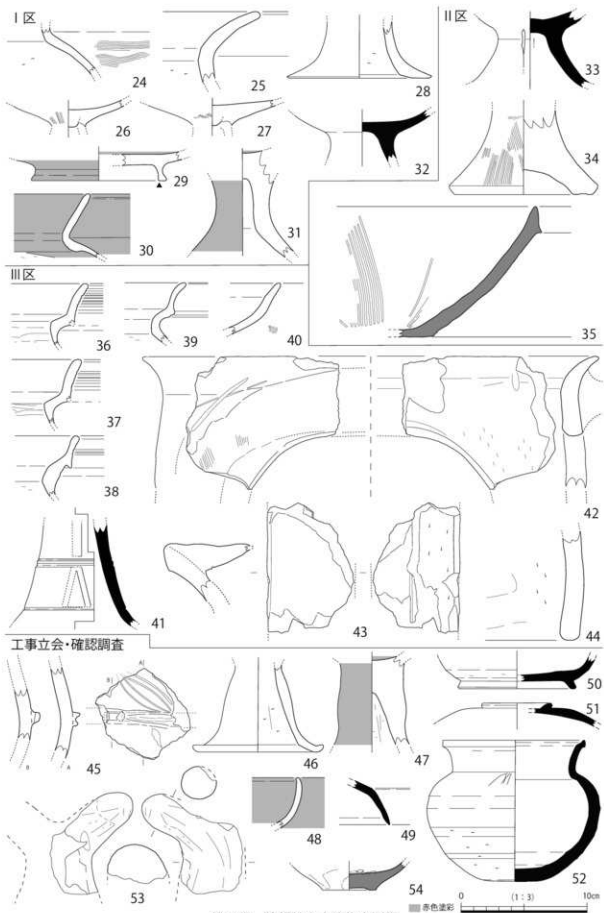
第6図 II区遺構実測図



第7図 III区遺構実測図



第8図 遺構内出土遺物実測図



第9図 遺構外出土遺物実測図

調査基本層序②③層出土遺物（24～44）や確認調査3区出土遺物（50）・工事立会出土遺物（45～49, 51～54）を図示した。

24・36～39・45は弥生土器である。弥生時代後期後葉～終末期の資料が中心だが、45は胴部に突帯が廻り、へら描きの木葉文を持つ弥生時代前期の壺である。突帯には刻目文と沈線文が確認できる。25～31・40・46～48は古墳時代～古代の土師器である。29～31・47・48には赤彩が観察できる。32・33・41・49～52は古墳時代後期後半～古代の須恵器である。33・41高杯脚部は2方向スカシである。53の壺肩部には細い傷がへら記号状に刻まれている。50高台付杯の内面には研磨痕があり、転用碗と思われる。34・53・42～44は古墳時代後期～古代の土製品で、34・53が土製支脚等、42～44が竈である。35は15世紀～16世紀初頭頃の備前系播鉢である。54は16世紀末～17世紀初頭頃の唐津碗で、灰緑色釉の青唐津である。内面には3箇所の胎土目が残る。

第4節 結語

今回の調査地は矢野遺跡の北端部にあたり、事業地の北部においては遺構・遺物が急激に希薄となる（第1～3図）。遺構・遺物は古墳時代中期後半～平安時代前期頃のものが最も多いが、Ⅲ区においては弥生時代後期～終末期に遡る遺構（S D 4・S K 5）が確認でき、工事立会では弥生時代前期に遡る遺物（第9図45）も出土している。また、10世紀以降しばらくの間は遺構・遺物がほとんど確認できず、再び時期の明確な遺構（S K 2）が出現するのが中世末以降となることも特徴的である。

調査地南方の第9次調査（第1図・出雲市教育委員会2010）では縄文時代晩期からの遺構がB区で確認され、弥生時代末～古墳時代初頭頃にはC区で明確な居住域の形成が、古代にはA～Cへと居住域の広がりが確認されている。遺跡北東端の第6次調査（第1図・出雲市教育委員会1991）では古墳時代末頃から遺構が、古代には複数の建物跡が確認されている。今回の調査地点でも弥生時代後期から古代にかけて徐々に遺構の分布範囲が拡大する様相が確認でき、矢野遺跡北部における集落の発達過程をうかがう上で貴重な調査成果となった。

注

（1）発掘調査次数の整理については、基本的に第9次発掘調査の報告書（出雲市教育委員会2010）でまとめた内容を準用している。ただし、第8次発掘調査については1991年の島根大学ほかによる発掘調査（田中義昭1992）を8-1次、出雲市教育委員会による発掘調査（出雲市教育委員会1992）を8-2次として再整理した。第11次調査は2023年に出雲市が実施した内容確認発掘調査で、別途報告予定である。

参考文献

- 田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本清・磯田由紀子1987「出雲市矢野遺跡の研究（1）」『山陰地域研究』No.3 島根大学山陰地域研究総合センター
- 田中義昭1992「Ⅱ-2 出雲市矢野遺跡第1地点の調査」『山陰地区における古代金属生産の研究』古代金属生産研究会
- 田中義昭1996「中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開」『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
- 出雲市教育委員会1991『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』
- 出雲市教育委員会1992『四路地区遺跡調査報告書』
- 出雲市教育委員会2010『矢野遺跡』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告10

第2章 下古志遺跡第6次発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

2021年、出雲市下古志町地内の集合住宅新築予定地（例言位置図・第10図）について事業予定者代理人と埋蔵文化財に係る事前協議を実施した。予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である下古志遺跡の範囲内であることから事前に確認調査を行うこととし、同年10月15日に実施した。確認調査の結果、事業地のほぼ全域で遺構が残存することを確認した（第11図）。その後事業者及び土地所有者と出雲市文化財課で協議を重ね、2022年7月から本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は、事業用地約1,000㎡の内、遺跡への影響が大きい浄化槽埋設工予定範囲の約30㎡を対象とし、2022年7月4日～7月20日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果、遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

<発掘調査に関連する主な文化財保護法上の文書等>

2021年

- 12月9日「埋蔵文化財発掘の届出について」事業者から市教委経由で県教委へ
- 12月17日「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

2022年

- 6月6日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 7月22日「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 7月22日「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 7月22日「下古志町地内集合住宅新築工事に伴う下古志遺跡発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 8月2日「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 8月2日「埋蔵物の文化財認定及び編入について」県教委から市教委へ

第2節 遺跡の位置と環境

下古志遺跡は出雲市下古志町に所在する集落遺跡で、出雲平野西南部、神戸川左岸の沖積地に立地する（例言位置図）。近隣の古志本郷遺跡・田畑遺跡・古志遺跡・思案橋北遺跡と一体的な広がりを持つ集落遺跡（第10図）で、これらは出雲市下古志町から古志町にまたがる大規模な集落遺跡群「古志遺跡群」と総称されている。古志遺跡群のほぼ全域にわたって弥生時代以降の遺構・遺物が数多く確認されており、出雲平野の中でも有数の規模を誇る集落遺跡群である。中でも遺跡群の中核を成す下古志遺跡・古志本郷遺跡では、これまで5次・14次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代中期～古墳時代前期の大溝を伴う大規模集落、古代の神門郡庁と郡家関連施設（古志本郷遺跡9・10次G区）などが発見されている（出雲市教育委員会2001・島根県教育委員会2003ほか）。また、中世期には有力領主であった古志氏が本拠としていた集落であることも知られ、当該期は遺跡の造営期間

の中でも遺構・遺物が最も広域に分布する時期となっている（出雲市教育委員会 2002）。

第3節 調査の成果

1 調査の概要（第11・12図）

事前の確認調査では、2m×2.3mの調査区2箇所（1・2区）、2m×2.6mの調査区1箇所（3区）、計約15㎡の発掘調査を重機掘削により実施し、1・3区で溝、2区で井戸と推定される土坑を確認した。3区の黒褐色土層からは土師器細片が、溝内堆積土からは須恵器甕小片が出土しており、事業予定地全域に中世期以前の遺構・遺物が残存しているものと判断した。遺構面の標高は1・2区で約8.7m、3区で約8.5mと西に向かって低くなる状況を確認した。

本発掘調査は確認調査3区南側隣接地の浄化槽埋設工予定範囲約30㎡を対象として実施した。旧耕作土までを重機で撤去した後、人力掘削によって徐々に掘り下げて遺構・遺物の確認を行った。基本層序は①造成土等②旧耕作土等③黒褐色土層（近世含む遺物包含層）を経て、遺構基盤層である灰黄褐色砂層・にぶい黄褐色細砂層に至る。遺構基盤層の標高は確認調査3区と同様に8.5m前後である。なお、基盤層は標高約8.3m以下で大量の湧水を伴う。

本発掘調査で確認した遺構としては、中世期と考えられる溝2基（SD1・2）、古墳時代後期～中世期と考えられる柱穴4基（SP1～4）、弥生時代の地形の落ち込み1箇所を検出している。その他、溝SD2南端付近の③層下面では中世末～近世初頭頃の土器溜まりを検出しており、その付近から和



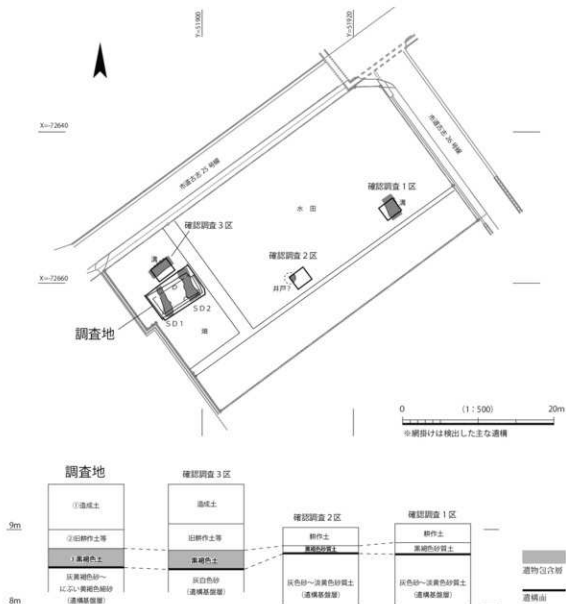
第10図 下古志遺跡第6次調査の位置

鏡が出土したことは特筆すべき成果である。

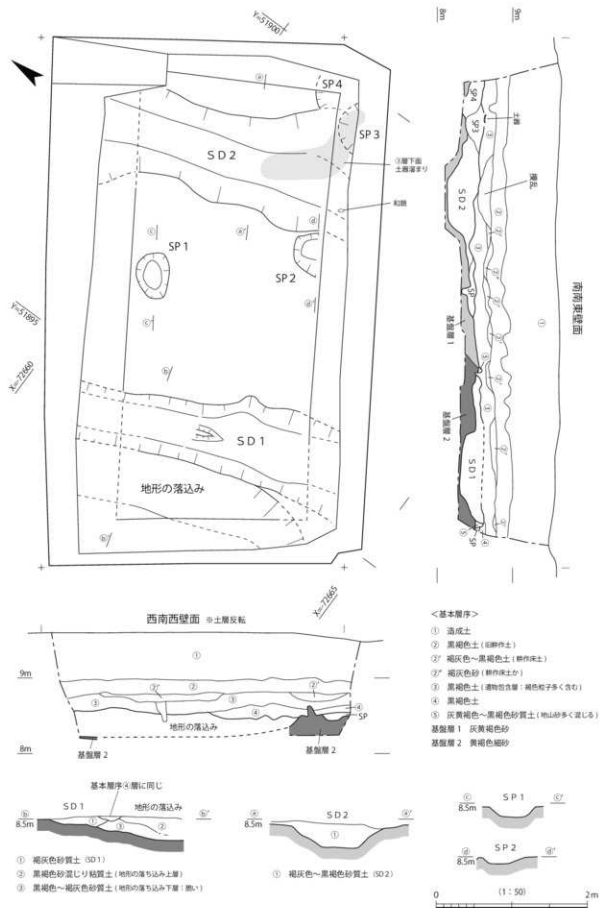
2 遺構と遺物（第12～14図）

溝SD1（第12図、図版6） 調査区南西で検出した溝で、南南東—北北西方向に延びる。検出長約3.5m、幅0.7～1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。底面の標高は8.3～8.4mで、北方に向けてやや浅くなる傾向にある。遺物は中世期とみられる土師器細片が少量確認できるのみである。後述の溝SD2とほぼ平行する溝であり、近似した時期の遺構である可能性が高い。

溝SD2（第12・14図、図版6・9） 溝SD1の北東約3.5m地点で検出した溝で、ほぼ平行方向に延びる。検出長約3.5m、幅1.1～1.6m、深さ0.3m前後を測る。底面の標高は8.1～8.2mで、明確な傾斜は確認できない。遺物は中世土師器（15）、青磁（16）、弥生土器（17）の小片が出土して



第11図 調査区配置と事業区内調査状況

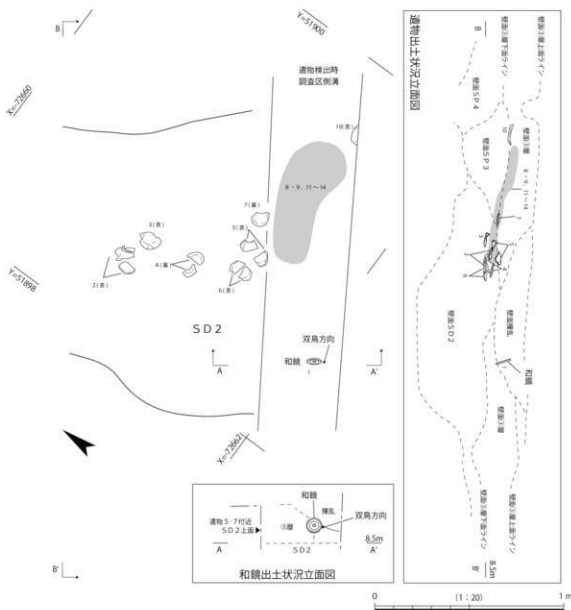


第12図 調査区・遺構実測図

いる。16は龍泉窯系の青磁碗で、大きい線書きの蓮弁文が確認できる。14世紀後半～15世紀前半頃の様相を示す。

柱穴（第12・14図、図版6・9） 調査区内で4基の柱穴（SP1～4）を確認した。いずれも直径0.6m前後、深さはSP1・2で深さ0.15m前後、SP3で約0.2m、SP4で約0.3mを測る。土層堆積状況から、SP3はSP4・SD2埋没後、土器溜まり以前に掘削されたことが確認できる。中世末頃の遺構であろう。遺物はSP2で弥生土器小片（18）、SP4で赤彩土師器高杯（19）が出土している。SP2出土遺物は必ずしも遺構の時期を示すものではないが、SP4は古墳時代後期～奈良時代頃の遺構であろうか。

地形の落ち込み（第12・14図、図版6・9） 調査区の西端で検出した地形の落ち込みで、上端は調査区南隅付近から北方へ不整形に延び、直線的ではない。上端の標高は8.5m前後、確認した最深部で



第13図 土器溜まり・和鏡出土状況実測図

約8.2mを測る。その形状と土層堆積状況から、溝SD1掘削以前に埋没した自然地形の落ち込みであると考えられる。遺物は、埋没土中に弥生土器片(20～23)が少量確認できる。埋没過程での流入品であるが、弥生土器以外の出土が確認できないことから、埋没の時期を示すと思われる。

③層下面土器溜まり(第13・14図、図版8・9) 溝SD2南端付近の③層下面で確認した土器溜まりである。その分布範囲は隣接する近代の攪乱の影響を受けている可能性があるが、明確ではない。

土器は、土師器皿13点(2～14)がまとまって出土しており、一括性が高い。口径10.8～12.0cm、底径5.6～7.4cm、器高2.3～2.7cmを測り、底部には回転糸切りが確認できる。総じて器高は低く、口縁はやや直線的に開いて端部をシャープに仕上げる。いずれも16世紀後半～17世紀初頭頃のものであろう。一括廃棄されたものと考えたい。

③層出土和鏡(第13・14図、図版7・8) 土器溜まり付近において、完形品の和鏡1点(1)が出土した。ほぼ直立した状態で出土しているが、近代の攪乱の影響を受けた出土状況である。本来は出土地点のやや北東方向で鏡面を下方に向けていたものであろう。土器溜まりとの関連性は不明であるが、和鏡出土レベルの下端はほぼ同一レベルであり、近接した時期の廃棄と考えて良いであろう。祭祀行為等を伴う一括廃棄であった可能性も考えられる。

和鏡は擬漢式鏡の菊花散双鳥鏡で、面径8.1cm、縁幅0.2cm、縁高0.6cmを測る。内区は亀鈕を中心にして菊菱の散文、その中で亀鈕と双鳥が接吻する文様構成となっている。界圏は二重で幅広である。内圏線の内側には珠文帯のほか、6所の粗雑な節状の盛り上がりが見られ、六花形を意識したものである。内圏線と外圏線の外側にはそれぞれ縦線文が見られる。

製作年代は15世紀頃と考えられるが、手擦れによると思われる文様の摩耗が各所に見られる。相当期間実用された後に廃棄されたものであろう。

その他遺構外出土遺物(第14図、図版9) その他遺構外出土遺物については極めて僅少であるが、本発掘調査基本層序③層出土遺物の内、比較的遺存状態が良好な資料を図示している。

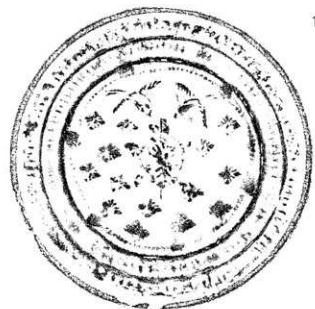
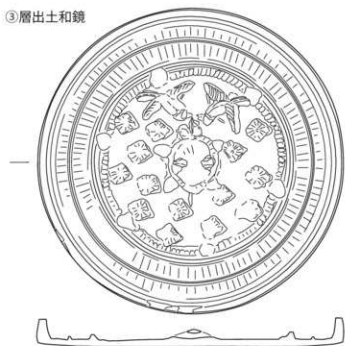
弥生土器高杯等の脚基部(24)、弥生土器・土師器等の脚端部(25)、須恵器高台付杯等(26)、青磁碗(27)の他、図化しなかった資料に須恵器甕体部や中世土師器杯等の小片なども確認できる。

第4節 結語

今回の調査地では、中世期の遺構が中心であった。中世後期～近世初頭頃の溝(SD1・2)、柱穴(SP3)、土器溜まりを検出したほか、土師溜まり付近から和鏡を発見した。遺構内出土遺物は僅少であるが、SD2出土青磁と土器溜まり出土土師器の時期から、14世紀後半～17世紀初頭頃の遺構が中心と思われる。また、確認調査1区の溝(第11図)もSD1・2とほぼ同一方向に伸びており、同時期の区画溝等である可能性が考えられる。その他の時代については古墳時代後期～奈良時代頃の柱穴(SP4)や弥生時代の地形の落ち込みが確認できる程度である。

特に注目されるのが遺物包含層から発見された和鏡、菊花散双鳥鏡の出土である。15世紀に製作され、土器溜まりと近接した時期(16世紀後半～17世紀初頭頃)に廃棄された実用品と考えられ、当時の富裕層が所有していたものとして良いであろう。中世後期の調査地周辺は武士または有力商家の

③層出土和鏡



1

0 (1:1) 5cm

SD 2



15



16



17

SP 2



18

地形の落ち込み



20



22



23



24



25

その他遺構外



26

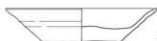


27

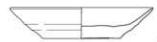
■ 非色塗彩

0 (1:3) 10cm

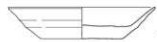
土器溜まり



2



3



4



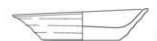
5



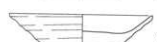
6



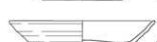
7



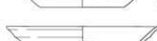
8



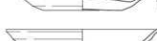
9



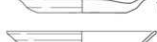
10



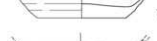
11



12



13



14

SP 4



19

第14図 出土遺物実測図

居住域であった可能性が考えられる。

中世後期において、下古志遺跡を含む古志遺跡群は国人領主「古志氏」の本拠「古志郷」の中心地であり、調査地北方にある近世山陰道沿い（第10図）には市場町も形成されていたとされる（浜村1956・古志町誌編纂委員会1990）。古志氏は1280年代頃に成立し、永禄5年（1562）に毛利氏の出雲侵攻によって古志郷を失うまでの300年近くにわたって当地を治めた領主である。杵築大社や領主権力と密接な結びつきを持ち、15世紀後半～16世紀初頭にかけては神戸川・日本海における水運権益の保有及びそれに依拠した広域的交流を行っていたことも指摘されている（長谷川1999）。和鏡の入手から廃棄に至る時期は、古志氏による日本海交流が活発化した頃から領地を失った頃にかけての時期に近く、その関連性も注目される。

今回の調査地は、これまでその様相が不明確であった下古志遺跡の北半部にあたる（第10図）。近年実施した下古志遺跡第4次調査（出雲市教育委員会2023a）でも、中世期以前の生活痕をわずかに確認できたのみである。ただし、今回の調査地の東方約200m、旧街道との位置関係も類似した立地である古志本郷遺跡第14次調査（出雲市教育委員会2023b）では、中世屋敷跡に伴う半町（54.5m）四方の区画溝など14～16世紀を中心とした遺構・遺物が多く発見されており、弥生時代や古墳時代後期～奈良時代頃の遺構・遺物も若干確認できるなど、今回の調査地の状況と類似した遺跡の盛衰が確認されている。中世後期における遺跡の性格も有力者の居住域等と考えられ、共通性が高い。

以上のような調査状況により、下古志遺跡北部エリアの状況も少しずつ明らかになってきた。下古志遺跡を含む古志遺跡群が立地する出雲市下古志町及び古志町においては、近年新しい店舗や住宅が急増しており、今後も発掘調査件数が増加することが予想される。遺跡群の全体像を把握するためにも注視していきたい。

参考文献

- 長谷川博史 1999 「出雲古志氏の歴史とその性格」『出雲古志氏とその性格—古志の歴史Ⅱ—』古志史探会編 古志公民館
 浜村台次郎 1956 「布智村史」『神門村誌』神門村役場
 出雲市古志町誌編纂委員会 1990 『古志町誌』
 出雲市教育委員会 2001 『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 出雲市教育委員会 2002 『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第12集 下古志遺跡—考察編—
 出雲市教育委員会 2023a 『令和4年度出雲市文化財調査報告書』下古志遺跡（第4・5次発掘調査） 出雲市の文化財報告 52
 出雲市教育委員会 2023b 『古志本郷遺跡（第14次発掘調査）古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告 53』
 鳥根県教育委員会 2003 『古志本郷遺跡V』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI

写真図版

図版1 矢野遺跡



I区全景（北から・右上が八野神社境内）



I区南半部（北から）



I区SK1・SD1（北から）



I区SD1遺物出土状況（北から）



Ⅱ区全景 (北から)



Ⅱ区 SD2・SK2・SK3 (西から)



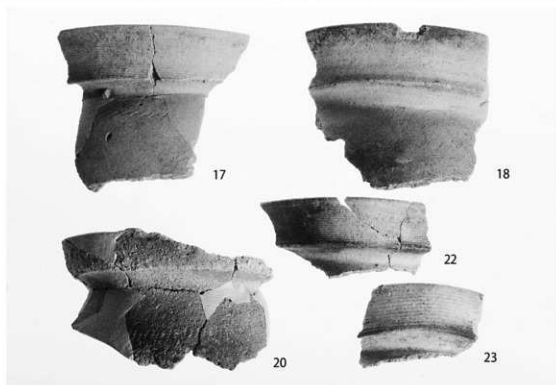
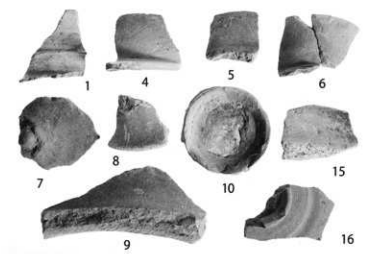
Ⅲ区全景（北から）



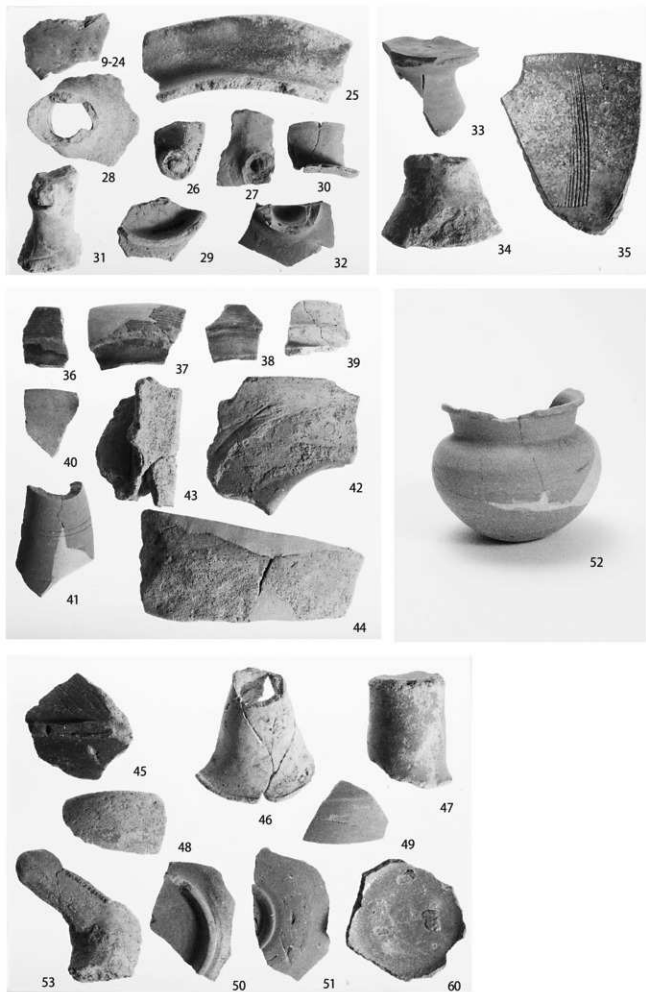
Ⅲ区 SK5 遺物出土状況（北東から）



Ⅲ区 SD4 検出状況（北から）



図版5 矢野遺跡





調査区全景 (北西から)



遺構検出状況 (北西から)



和鏡出土状況1 (西から)



和鏡出土状況2 (西から)

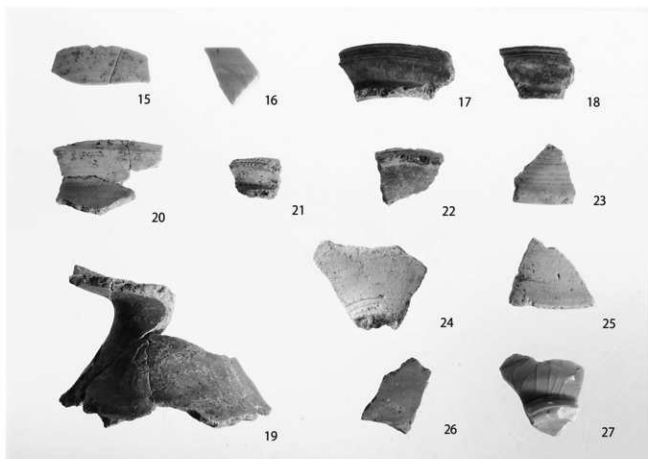
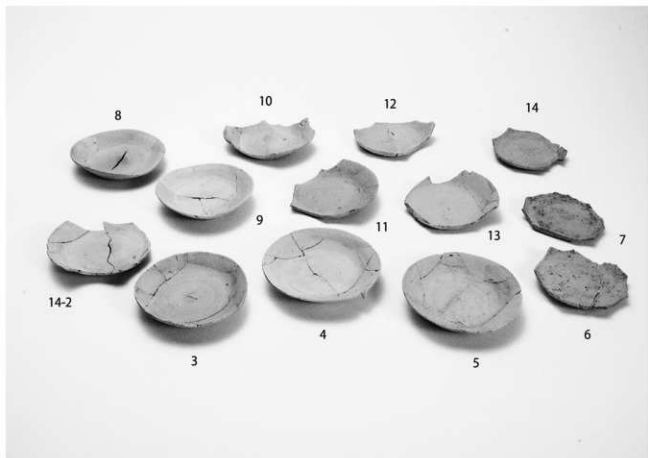


土器溜まり土師器出土状況（北東から）



14-1

出土遺物 1



報告書抄録

ふりがな	れいわごねんどいずもしぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	令和5年度出雲市文化財調査報告書						
副書名	矢野遺跡（第10次発掘調査） 下古志遺跡（第6次発掘調査）						
シリーズ名	出雲市の文化財報告						
シリーズ番号	56						
編著者名	須賀照隆（編）						
編集機関	出雲市 市民文化部 文化財課						
所在地	〒693-0011 島根県出雲市大津町2760 TEL (0853) 21-6618						
発行年月日	令和6年（2024）3月						
ふりがな	コード			北緯	東経	発掘期間	発掘面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				発掘要因
矢野遺跡 （第10次）	島根県出雲市 矢野町732番ほか	32203	W3 <small>（発掘調査番号）</small>	35° 22′ 49″	132° 44′ 21″	20190128 ～ 20190228	約100㎡ 集合住宅 新築工事
下古志遺跡 （第6次）	島根県出雲市 下古志町628番2ほか	32203	W112 <small>（発掘調査番号）</small>	35° 20′ 38″	132° 44′ 16″	20220704 ～ 20220720	約30㎡ 集合住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
矢野遺跡	集落遺跡	弥生時代～中世		溝・土坑・柱穴		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	矢野遺跡北辺部の様相を確認
下古志遺跡	集落遺跡	中世		溝・柱穴・土器溜まり		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 和鏡	完形の和鏡（菊花散双鳥鏡）が出土
要約	<p>民間開発事業に伴い矢野遺跡第10次、下古志遺跡第6次の発掘調査を行った。</p> <p>矢野遺跡第10次発掘調査では、弥生時代後期～平安時代前期頃の土坑・溝・柱穴、中世末以降の土坑・柱穴などを確認した。遺物包含層からは弥生時代前期の土器も出土している。また、矢野遺跡の北辺部における遺構と遺物の分布範囲を確認できた。</p> <p>下古志遺跡第6次発掘調査では、中世後期～近世初頃の時期を中心に溝・柱穴・土器溜まりなどを確認した。土器溜まり付近の遺物包含層から完形の和鏡（菊花散双鳥鏡）が出土したことは特筆すべき成果である。</p>						

出雲市の文化財報告 56
令和5年度出雲市文化財調査報告書
矢野遺跡（第10次発掘調査）
下古志遺跡（第6次発掘調査）

令和6年（2024）3月 印刷

編 集	出雲市 市民文化部 文化財課 〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地 T E L (0853) 21-6618
発 行	出雲市教育委員会 〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
印刷・製本	株式会社 報 光 社